
ネギま！ ～抑止の断罪者～

マ・クベ的な走馬灯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！ ～抑止の断罪者～

【Nコード】

N0445BA

【作者名】

マ・クベ的な走馬灯

【あらすじ】

とある少年が、最低系転生を狩る為に「ネギま！」に酷似した世界に転生する物語です。

前回の反省と教訓を活かして投稿しました。作者作品共にダメダメな部分があるかも知れませんが、キツイ所はスルーでお願いします。駄文です。

プロローグ（前書き）

醜態を晒したのに、それでもお気に入りユーザーに登録し続けていただき、応援していただいて、本当に有難うございます。

修正作品を期待していただいた方々がいらっしやっただので、書き始めました。

コレを不快と感じる方は、ユーザーバッグをおすすめします。

そして何より、文才がなく駄文です。それでも宜しければ、読んでください。

プロローグ

人は死んだら、何処へ逝く？

先週の夏祭りで、殺気と覇気と闘気溢れる異常な出店のオヤジが、俺に玩具には思えない程黒光りした玩具(エモノ)の銃口を向けながら言っていた言葉だ。

審判の間？ 極楽浄土？ 地獄？アスタロト それとも。

「……知らねエよ」

そんな呟きを漏らしながら、俺はその日の眠りについた。

その一言が、俺の普通な人生の最後のだと思ってもよらずに。

目覚めの景色は、知ってる天井でも、知らない天井でもなく、眼前を埋め尽くす白い、白い白い、白々しいと日本語の使い方を間違えるくらい、真っ白な空間だった。

天井すら無かった。

「ンだア……ここは、………夢か？」

俺は、この広々とした空間に一人ポツンと立っていた。

真理の扉？ イヤイヤイヤ、鋼レンの観すぎだ。

扉無エし。

にしても、夢にしちゃア随分リアルティー高エな。
立っている感覚も視覚も含めた五感も。

しかし、……俺は何だつてんなトコに居るんだ？ 俺は人体錬成
した覚えは無エぞ。

「当たり前だ、君にそんなことが出来る筈ないだろう」

後ろから声がある。

高い様な、低い様な。声というより音と勘違いしてしまう様な、
なのにハッキリ意味が理解できた、そんな声。

あん？ 声と音は違うだろ？

固いこと言うなよ、あくまでも俺の主観だぜ？

まア、そんな事はどオでもイイ。

声のした方に振り向いたソコには、髪の毛長い長い白髪の男だった。
髪が長いせいで顔がよく見えない。よくて口元だけだ。

「誰だ？」

「さて？」

いや、聞き返されても困るんだが。

「まあ管理者とでも思ってくれ。マトリックス的な」

「随分フレンドリーな話題が出たなアオイ」

「さて、君はここに居る前はどっしっていた？ 思い出してみる」

「ここに居る前？ そりゃアオマエ、

普通にベットで就寝して……………」

「此所か？」

俺の言葉を奪うようにソイツが答える。

人の思考読むンじゃねエ。

「だから、何だって俺はこんなトコに
結果だけなら、虚血
性心疾患での狭心症だ」 何だって？」

「君は死んだと言ったのだ」

「……………マジか」

よりもよって死ぬ直前にあんな事思い出したのかよ。

「……………驚かないのか？　というか信じるのか？」

「驚いて欲しいのか？　それとも信じて欲しいのか？」

「……………面白いな君は」

五月蠅エ。

「そんで、死んだ俺に何か用か？　俺にはとてもじゃねエがオマエが閻魔にやア見えねエンだが？」　俺の想像上では。

「……………フフ、良いな、その度胸。自分が死んだと言われてその冷静な態度。気に入ったよ」

気に入ってンじゃねエ、こちとら結構ショックなんだ。

「君にはこれから新しい人生を送ってもらう。とても愉快で残酷な世界にだ」

「待て待て待て、話ハシヨリ過ぎだ。もちつと説明寄越しやがれ、それが話始めた奴の義務だろオが」

「ふむ、そうだな……最近私の管理している世界に矢鱈異物が混入してくるのだよ。道化風情が、舐めた真似を」

いきなり話がデカくなりやがった。世界の管理者って事は……”座”か？

「まあ君達の知る根源とは少し違うがね」

思考を読むのはデフォなンかよ。

「じゃア俺はその黴菌みてエのを駆除する白血球になれと？」

「そうだ、君には仏教で言うところの転生をしてもらう。ついでに生前最期の日に読んでた漫画の力を手に入れて」

漫画だアあ？ また随分飛躍したな。

えーと、読んでた漫画つつたら……『NEEDLESS』。NE

EDLESSの力つつたら『フラグメント破片』。
フラグメント
破片つつたら、

「キリストセカンド？」

「ではそれで。ついでに死なない程度の力もな」

「うおいつ！！ アバウト過ぎンだオが！」

「勿論嘘だ」

「……………」

「摂理代行者の特性上、アレが一番やり易いのだよ。後、ワタシ管理者が気に入らない異物が侵入したら駆除してくれ、『アダム』」

ファンタジー極まりねエな。二次創作見ててよかったわ、普通混乱する。

後アダムって何だ。

「『アダム』とは、二千年に一度神が人類を直接導く為に送り込まれる、神の摂理代行者を指す言葉だ。とはいったものの、私は神

ではなく管理者だ。しかし私的には同じ意味合いと思っている」

「じゃア何だつてんだ」

「言ったたろう、異物を駆除する抑止力モになってくれと。私が気に入らない異物は、君の意思とは関係無く駆除してもらう。いや、君にとって受け入れがたい存在になるだろう」

「ふーん」

まアあ、これがドッキリでも、嘘でも、

冗談でも、ジョークでも、演技でも無く、

本当だと仮定する。

「拒否権は？」

「勿論あるぞ」なら断る」ただ、その場合君は真の意味の死を迎えることになる。輪廻の輪から外れて消滅だ」

「……つまり、拒否したら俺は終わりか」

「然り」

提案じゃねエ、

やらないと消すぞ。

脅迫だ。

「選択肢なんざありやしねエな、オマエ絶ッ対性格悪イ」

理不尽もいい所だ。殴りたい殴りたい殴りたい殴りたい。

「ハッハッハ、固いことを言うな。勿論報酬も用意している」

ハッハッハじゃねエよ、基本は守護者の真似事極まりねエだろ。

張り倒すぞ。

「報酬は『世界に囚われない』、だ。つまりはその世界で君に修正力や抑止力は働かなくなる。全ての異物を取り除いたらな」

「あーあ、判りました判りました。やりゃアイインだろやりゃア」

「フム、自棄^{ヤケ}にやったか。予想より早いな」

聞き入れたと言え。つか狙ってただろ。

「まア、やるからには本気でやる。だから俺が白血球なら、黴菌が入って来ないよオ傷口塞げよ」

「無論だ」

「異物の判断基準は善悪か？」

「それが一番大きいが、基本気に入らないと駆除してもらおう」

つまり、テンプレ紛いで転生した奴で、明らかに危険と判断した者の排除。

俺もそのテンプレなんだが……殺し……か、。

……俺こんな順応性高かったか？

「……何で、俺なんだ？」

俺は自分を特別な人間とは思えない。

自分を特別だとか思ってる奴は、大概が自意識過剰な自己チューかナルシストだろう。

「……………大した意味は無いが、今は言えない。」

だが、君は自分が一般人だと思っているなら一般常識は学び直したまへ。君は間違いなく規格外だ。」

「は？」

遠回しに馬鹿にされた気分だ。

「まあ安心したまえ。君一人に丸投げする訳ではない」

「何だ？ 俺以外に異物排除をやってくれる奴でもいんのか？」

「正確には君の補助として人材を二人ほど送る。『セイバー』と『キャスター』を」

「……………サーヴァント?」

「準備が出来れば令呪が浮かび上がる。楽しみにしたまえ」

「頼むからジャンヌ狂いのギョロ目だけは止めてくれよ!?!」

セイバーは兎も角、キャスターは下手すりゃ召喚した瞬間最悪殺さねエとヤベエ。

狂気性が無かったとしてもギョロ目は精神的にキツイ。

「君が危惧する事はないから安心したまえ」

「ホントだオナア……………」

唯でさえ現実逃避してエってのに、これ以上引つ掻き回されたくねエ……………。

仕事が終わったら絶対にコイツをボコる。

「……………ハア、じゃアなクソツタレ」

「頼むよ。新たなる抑止よ」

その言葉を皮切りに、俺の視界が霧がかかったように曇っていき、ソレと同時に凄まじい睡魔が襲ってきた。

地面に穴が空くとか、そオいうのじゃねエのが救いか。

あー……眠エ……。

「ついでに君は特別稀少な生まれにしておくよ」

……あ？

そこで、俺は意識を失った。

『そうだな……コイツの名前はニラだズゴバツ!?!』

『バカモン! 次男と長女は私が名前を付けると言ったであろう!?! とうか何じゃ! ネギといい さっきのいい……この二人は私が決める!?!』

『ちえ……まあお前はネギだからな! 髪の色は俺似だし』

何だア……? 耳元でギヤーギヤーギヤー。クソツタレが、目の前が真っ暗じゃねエか。

『うむ、お前はレン!?! この子はアリアじゃ!?!』

『! それはアイツの名前じゃあ……!?!』

『判っておる。だからこそ、あやつのように育て欲しいのじゃ』

『……、ソイツはニラだろバブハツ!?!』

……真っ暗で何も見えねエが、片方の奴はアホだ。直感がバンバン叫んでやがる。

『しかし……、レンは生まれた時から泣かぬが……、息はちゃんと出来ておるのか?』

うおっ!?! 頬突っつくなア!!

「やばびべへエ(やめるテメエ)!!」

『……ハ、嫌われてるのかアリカ?』

『うっ、嘘じゃ! 違う! そうであるうレン!!』

おっ、ちよつとずつ見えてき………た、……嘘だろ………。

俺の眼前には、金髪超美人が涙目でコツチに訴えかけてやがる。

可愛いなオイ。

「やっぱりニラの方が良いんじゃないかねえか? ほら、そうだろニラ

」

にやけ面でコツチに指を近付けてくる赤毛の超美形。アホはコ

イツか。

「だばンば(触んな)」

ビシッ。

近付けてくる指を腕で弾く。

「……………ッ!」

「な、ナギにも同じ反応! ど、どっちが良いのじゃ!? レンかニラか!」

ハア? 人名を指してんなら、

「レンでいびばっでんだぼっば(に決まってんならだろっが)」

金髪美人の指を取る。

あ、赤毛が絶望した。ざまア。

ああーあ、了才解了才解。赤毛がナギで、金髪がアリカ。

俺がレンで、右側の奴がネギ。左側の奴はアリア。……コイツは知らねエなア。

俺を含め、三人は全員赤ん坊だ。

あア……………「こ、こ、ネギま！」か。

その日、俺はレン・スプリングフィールドになった。

ポジションニング最悪ウウウウウウウツ！！！！

妹（前書き）

連続投稿

妹

正史に本来存在しない筈の、抑止力が生み出した主人公の弟。抑止そのもの。

レン・スプリングフィールド。

それが『彼』の新しい名前。

大戦の英雄と大罪を擦り付けられた王女との遺児として生まれた彼は、

頭を抱えた。

なんとという死亡フラグの山。

唯でさえ乳児生活という羞恥的拷問を余儀なくされているというのに、物語の中核と問答無用に巻き込まれる定め。

別にどオでもイイか、で済まされねエよ。

同時にレンは、嬉しくもあつた。

原作では描かれていなかった空白の十年間。

ソコには確かに幸福が、笑顔があつたのだから。

すぐに両親と別れることとなる事を知っていたが。

『コスモ・エンテレケイヤ完全なる世界』とM Mとの戦いで、自分達の近くに居るよりも、ナギの故郷であるウエルズに預けた方が安全と判断したからだ。絶対的な力を持つ彼だが、赤子極まりない状態で抗える筈も無い。

とは言つたものの、新生児時代で唯爆睡を貪っていた訳ではない。預けられるまでの激闘（という名のフルボッコ）を目にしただけなのだが、それでもレンにとって貴重な時間だ。

紅き翼達の戦闘を垣間観る。

紅き翼達の技術を覚えられる。

そして赤子なら記憶に覚えていないであろう戦いの残酷な部分を見せ付けられた。

人の死。

生への憧憬

殺し。

殺戮。

戦いの光景。

破壊の光景。

覚悟を持った殺し。

常識の蹂躪。

魔法という非常識かつ非現実的な、不条理で理不尽な現実。

魔法が如何に危険なモノなのか、嫌でも自分があり得ない場所に生きている事を自覚される。

これは夢では無い現実なのだと思わせられる。

そんな光景を冷静に考察出来ている自分の異常さを認めさせられる。

だからって魔法という技術の全てを否定する気は、レンには無い。そんな暴力性の中には、治療等の生きるために役立つ技術が魔法にはある。

世界にはある。何処にでもある幸福。笑顔。

端からみたら苦しい状況の中にも、小さな小さな幸福があった。

同時に胸糞悪くなる屑も勿論いるのだが。

「なんてほざいてる間にもオ2年かよ」

「何を言つとるんじゃお前は」

そんな事をばやいてる間に、レンは自分の異常さを隠すのを止めた。

良くも悪くも、レンは大戦の英雄の息子。

英雄に陶酔する村人から逆に異常さを求められる。そんな異常な環境にいるのだから、悪態の一つでも吐かねばやってられないのだ。

分厚く、内容は並の魔法使いでは分からない本のページを捲りながらのレンの呟きに対し、即座にツツコミを入れたのは、スタン翁

ナギが幼少の頃に世話になり、その子どもでもあるレン達の世話をやいてくれる老人で、数少ないレン達自身を見てくれる人物だ。

村人の殆どは、レン達を通してナギ・スプリングフィールドを見てしまう。

レンは頭の上で魔法の矢を回転させている。

魔力の制御の練習をしているのだが、回転する速度がおかしい。

最早光は円に見える程の速さだ。普通の術者なら、その魔力制御力に呆然とするだろう。

「一歳頃じゃったな、ソレをし始めたのは」

「どんなに魔力を保有していても、魔力をコントロール出来ねエ
ンなら宝の持ち腐れだからなア」

レンが一歳になったら声帯がある程度成長し、喋れる様になった
途端に喋り出して魔法発動体をくれとせがんだのだ。

英語とかは根性、ではなく日本語が分かる者がいただけなのだが。

何故魔法発動体の事を知っているのか？

本来ならば複数の疑問が生じ、そして恐怖に変わる。

だが、英雄の息子はレンに味方し、英雄を陶醉する村人は歓喜は
しても恐怖はしなかった。
ネームバリユー

内心恐々だった、とは言わない。

レンが管理者から貰ったモノは、神の肉体と神の力。

それに伴う膨大で莫大で絶大な、それこそ極東最強魔力保有量を誇る近衛木乃香が矮小に見えるほどの魔力。

そして摂理代行者としての権限の行使。

確かにバグと言っても差し支えない程の力だが、だからと言って力に溺れて暴走しては洒落にならないから練習をと思つての事だ。

紅き翼達の技術を覚えたと言っても、攻撃魔法ばかり。攻撃手段は神フラグメントの力で充分。

何事も努力無くては使命タリシなど出来はしない。

そんな様子を、酒でかなり赤くなった顔でスタンが見守る。

「ナギの奴は底無しのバカじゃったというのに、何故生後1年で卓見した様に喋り出す天才が生まれたのか…」

「さあな、親父のアホ部分を母さんが上手エ事調節してくれたんじゃないアねエの？ 後、飲みすぎだ」

明らかに2才児と老人の会話では無い。

「ネギ達は？」

「ネカネの帰りを待つとるよ。今日から魔法学校の長期休暇じゃから、帰ってこられるだろうしな」

「……………」

スタンは酒を飲み始め、会話が終了する。レンは自分の感覚を管理者に繋げた。

端から見たらただ目を閉じているだけ。

しかし原作の龍宮真名のように魔眼を持っているならば、レンが何れ程異常な事をしているのが分かるかもしれない。

『オイ』

『何だね？ 君が態々私に連絡を取るのには驚きだな』

その会話は、念話では無い。

高次元干渉。

何処かの宗教者ならば神託とも取れるやり取りだ。

管理者と、その摂理代行者だからこそ出来る行為。それに割り込むことは、神格の更の上。他の管理者でも不可能だ。

『何で死亡フラグ溢れる出見にしたのか色々言いてエ事もあるが、一つだけ答える』

『俺の妹は、何だ？』

そう。衝撃的な再誕を遂げたレンだが、更に驚愕な項目があった。

レンには妹がいる。

名はアリア・スプリングフィールド。

本当に驚いた。驚愕した。吃驚した。

例外である自分以外の、原作に存在しない異物。

真つ先に浮かんだのは、摂理代行者としての使命の排除。

異物

しかし赤子　しかも妹相手では、道徳的に無理だった。異物に對して感じるであろう嫌悪感が、欠片も感じなかった。

何より、管理者が物語　世界の流れの中核になる者の、しかも態々自分が送った摂理代行者の親族に、異物の侵入を許すか？

その疑問は確信に変わる。

『その娘は

元解脱者なのだよ』

『

あ？』

解脱者。

世界　宇宙とパスを繋ぎ、抑止力を越えて輪廻の輪から脱つてしまった者。

魔術師達は、根源への到達と呼ぶ。

『待、てよ。解脱しちまったら、世界と一体になって人としての
個を喪つちまい、輪廻の輪から外れて消滅するンじゃねエのかよ！
？』

『本来はな。だが彼女は解脱すると共に英霊の座に至った者なの
だよ。正確には世界と契約して、だが。』

勿論、英霊の座に至った者と云えど消滅してしまうのだがな』

『なッ』

『!?!』

つまりアリアは、かつて靈長の守護者だったということとなる。

『特例だったのな。抑止力を越える程の価値を持つ彼女の魂は、
喪つには惜しい。なんせ一度はアレの器になったのだから』

『……………』

「しかし魂の解離から彼女を救うには、他の英霊が全能力を与え
ない限り不可能だった』

だが、それは他の英霊の、英雄としての誇りを捨てるのと同義。
アイデンティティーの否定。英霊の座から外れ、輪廻の輪に還る
事を意味する。

かの征服王は臣下との絆、信念が宝具として顕現している。

その絆を棄てると言われて、頷く訳もなく。

誇りある英雄に対してそんな望みは叶わないし、記述が存在する
限り世界が許さない。

そう、唯一人の例外を除いて。

『 エミヤシロウ 』

『 シー 』

『 彼はあっさり引き受けてくれたよ 』

エミヤシロウ
衛宮士郎。

かつて正義の味方に憧れる強迫観念に突き動かされてきた少年が、その破綻した理想で世界と契約して死してなお、人々を救うために英霊となったが、世界に縛られ結果的に世界に大量虐殺を強要させられ、その果てに絶望した。

過去の自分を殺そうとした正義に絶望した英霊。

そして過去で答えを見つけ、歩み続ける未来の英雄。

未来の、しかも反英雄扱いの為に記述も無く、誇りも無い。

彼としても、世界の束縛から解放される。

『つまり、アリアは英霊エミヤシロウのオリジナル「固有結界」アンリミテッド・フレイドワークスを持ってンのか？ 随分分かりやすいチートだな。魔術教会が有ったら間違いなく狙われるぞ』

『異能関係は「ネギま！」のみだから魔術教会は無い。故に封印指定になる事は無いが、人体実験の為に捕まえられたらかなわん』

心象風景の具現化。

この世界に描いても、世界を侵食する大禁呪は異端でしか無いの
だろう。

『にしたって、英雄の娘に据えたつつつても危険性は拭えねエだ
ろ』

例え英雄の遺児だとしても、いやだからこそ利用しようとする輩
は山ほどいるだろう。

それこそMMの元老院を筆頭に。

『だからこそ、君の妹に据えたのだよ』

英雄の、ではなく、レンの。

『（よオするに押し付けたンだろオが）……ソイツに前世の記憶
はあンのか？』

『無い。あつたとしても臆気だろう。一度輪廻の輪に還ったのだ。
ただ、英霊エミヤシロウの記憶はあるやもしれんがな』

「あの地獄をかよ………チツ、クソツタレが」

「バカモンが〜！ イタズラをするなどおいったじゃろおがああ……ぐう」

「ブツ！…!？」

突然の奇声？ にレンが嘔く。どうやらスタンが酔い潰れてしまったようだ。

「つうか、どオいう潰れ方だ」

おそらく昔ナギの夢でも観たのだろう。

それに気をとられてか、回転していた魔力球が止まる。

魔法サキタ・マキカの矢であって、決して某白い魔王のアクセシューターではない。

暫く魔力球を眺めた後、レンは本を閉じて自分に向かって魔力球を放った。

絶大な魔力が込められたソレは、2歳児のレンを容易に肉片に変える威力がある。

レンに命中した魔法の矢は、

しかし、レンを肉片に変えることなく霧散した。

「ハア……………」

レンの悩みの種その二。

完全魔法無力化能力。

「アイツ、稀少な生まれって言ってたが……………コレは無エだろオが……………」

『ネギま!』の物語の鍵となる神楽坂明日菜　　アスナ・ウ
エスペリーナ・テオタナシア・アンテオフュシアが持つ、魔法世界
の終わりと始まりの力。

ウエスペルタティア王国で百年間生まれなかった黄昏の姫御子の
能力を、レンは持ってしまったのだ。

……こんなンバレたら、コスモ・エンテレケイヤ『完全なる世界』とメガロメセンブリアMMの老害共に何さ
れっか判りやしねエぞ……ッ!!

アリアの事があるというのに、それが馬鹿らしくなるほどの問題
が浮上し、レンは頭を抱えた。

英雄の才をこれ以上無い程受け継ぐ息子、更に今は無き王国の力
をもその身に宿している。

黄昏の姫御子は能力だけで、薬で体と精神の成長を阻害されて百
年間兵器として扱われていたというに、そこに大戦の英雄の息子も、
タグに追加された。

せめて見た目が父親似であればなんとか出来たのだが……、

『大体何で俺の容姿がこんなになってんだよ？』

生憎レンの髪はまるで色素が抜け落ちた白。

つり上がった鋭い眼、瞳は血色で、しかしルビーの様な輝きを持つ赤。

その瞳孔は縦に伸びている。

というか、容姿以外のパーツが某学園都市最強の超能力者の小さい版だ。

後他に何か思い当たる節が有るが……瞳孔とか。

『問われるならば答えよう。』

君の体はとある英霊を用いて創ったのだ』

『……何？』

『君に与えたのは神の肉体と神の力。だが、同時に私の摂理代行者、つまり人でなければならぬ。つまりは必然的に半神に行き当たる』

『……』

『ソレを両立出来、尚且つ神の力を納められ、神の肉体足り得る存在。目下そんな規格外な英霊は一人しか居なかったのだよ』

半神であり英霊。そして神一人分の力を受け止める　言い方を
変えれば、飲み干せる事が出来る英霊。

『まさか……』

『英雄王ギルガメッシュ。』

彼を元に君を造り上げたのだよ。

髪は神の力を与えたせいで白く、魂は黄金から白銀に変わってしまつたようだがな』

つまりこの身は金ぴかボディ。

そう認識した瞬間、レンはポケットに違和感を感じた。

何も入っていなかったポケットには、とある鍵剣が入っていたのだ。

ギルガメツシュの宝具たる、『ゲイト・オブ・バヒロン王の財宝』を開くための鍵剣が。

『髪形は私の気分で選んだ。反省はしているが、後悔はしていない』ブツッ、

餓鬼かオマエは。

「は、ハハハハハ……」

ツッコミ処がありすぎて、もう笑っしかない。

他の転生者もこんな感じなのだろうか、だから愉快犯みたいになってしまうのかと。

「 にいさまっ! 」

そんな乾いた笑いをしていたレンに、同じくらいの歳の幼い少女が抱き着いた。

「にいさま、だいじょうぶ？ 頭痛いの？」

先程元解脫者と説明を食らったレンの妹、アリア・スプリングフ
イールドだ。

彼女も髪は白く、瞳も赤。だが、髪はアルビノの様な訳ではなく
雪に近い。

「………… いや、何でもねエよ。それより、ネカネ姉さんはどオ
したんだ？」

「ネカネお姉さまは、けんかを始めたネギとアーニヤさんに付き
合っただけています」

またか。と視線をずらして呟く。

おそらく馬鹿親父関連だろう。

「そんなことより、わたしはにいさまのお話が聞きたいです！」

「（ナギが聞いたなら泣くんじゃねエの？）そオか？ じゃア、プ
ルトニウムの考察について」

『アリアの真名は？ アイツは何の英雄なんだ？』

レンはアリアと話ながら、先程の管理者との会話を思い出し、独り考える。

これから彼女に降りかかる苦難と試練で溢れた人生を送る事になるだろう。

「なア、アリア」

「何ですか？」

「オマエは俺が助ける、兄貴だからな。」

だからせめて、

「じゃあ、わたしがにいさまを護る！ わたしはにいさまの妹だから！！」

「そオカ。じゃア頼ンだぜ、アリア」

「はいっ」

『彼女の真名は

』

彼女が一人前になるまで、自分が出来るだけ見守ろうと。

ンツベルンだ』

『

”カウンター・カウンターガードディアン森羅の守護者”、イリヤスフィール・フォン・アイ

この約束が、一年以内に破られる事を知らずに。

妹（後書き）

かなり無理がある設定です。

頭悪いなあ自分（ ; ; ）

気が向いたら感想を。

崩壊の足跡（前書き）

外出中に携帯の電池が切れて、投稿が思ったより遅れてしまいました。

ではどうぞ。

崩壊の足跡

「そうね。あなた達のお父さんは、とっても有名な英雄……そうね、ヒーローみたいな人だったのよ」

「ヒーロー？」

「そう、誰もが危機ピンチになったらどこからともなく現れて、必ず助けてくれるのよ」

違うな。

ヒーローってのは、一から十まで何から何までまとめて救っちな偶像みてエな存在だ。

英雄？ 笑わせんな。
九守せかいれてもテメエのかぞく一ひとつ守れねエ奴に、そんなモンを名乗る資格は無エ。

そこに”大戦”がついちまうと致命的だ。唯でさえ守れてねエ家族を更に危険な目に晒される。

テメエの手で家族を護るってんなら幾分話は違うが、育児放棄に消息どころか生死不明。コイツは許される事じゃねエ。

そこにどんな理由があってもなア。

ナギ・スプリングフィールドが世間的には当日の少年少女にとつて何れ程憧れの的だろオが、親としては虐待してるクソの一步手前だ。

「ヒーローかつこいい！ ネカネお姉ちゃんも助けられたことあるの？」

「フッフ、それはひ・み・つ・よ」

現在名実共にナギ・スプリングフィールドにネギ、アリアに対して親を名乗る資格は無い。

「とまあ愚痴ったところで、俺も似たよオな事しねエといけねエ
ンだろオなア」

「？」

俺の呟きに、アリアは意味が分からず頭を傾ける。

「転生者を殺す為だけにこの世界に生まれ、俺という存在が本来の
正史を悉く破壊する。」

更に役目レが終わったらのうのと生きていく。

俺も似たよオな屑だ。

だからさっきの考察モードキを、俺が口が裂けても言う資格は無い。

ナギ自身に会ったら、俺がホールドかけてアリアが頭を蹴り飛ば
すくらいで許してやるう。

ネギ？ アイツは何か普通の再会みたいでノらなさそうだなア。

「にいさま、おとうさまはどの様な方なのですか？」

……………何で俺に聞くんだアリア？

「なんとなくです。先程のネカネおねえさまの話にはフィルターか何かかかっていると思っんですよ」

読心術に直感か。

直感はB入るな。

何このハイスペック妹様。

流星はガイアの守護者やってたことはある。

契約つつウウのは、アラヤだけだと思ってたんだが、まさかガイアとは。

将来が楽しみだつつウ話だよ。

「普通、俺はアリアやネギと違う方法で親父殿の情報は入らねエと思っんだが？ ……まアイイか」

「えっ！？ レンはおとうさんの事知ってるの！？」

離れていたところにいた筈のネギが、俺の話に飛び付いてきた（無論比喩）。

オマエのファザコンリーダーすげエなア、ネギ。

「ネギ、オマエネカネ姉さんはどオした？」

「ネカネお姉ちゃんは教会に行ったよ。それより早くとうさんの話を」

ネギが駄々を捏ねている間に、教会の事を説明しておこう。

この教会は魔法使いが滞在している、又は住居を設けている村等には必ずと言ってでも存在する。

そしてこの教会が祀っている存在は、俺に平静を奪うには充分な者だった。

ザ・セカンド。

又はキリストセカンドと呼ばれる存在^{かみ}。

えらい混じってますねー(; ;)

マホネットによれば、この神の再来ザ・セカンドが初めて現れたのは、今から600年前。

丁度魔女狩りが盛んな時代だ。

彼は理不尽な魔女狩りから民を救済し、導いたという。

彼が神と呼ばれる所以は、魔法以外の未知の力だと謂われている。

彼は何も無い所から火や水を生み出し、人々を飢餓から救い、どんなに絶望的な怪我や病もたちどころに癒し、数万の軍勢もたった一人で立ち向かい、嫌々ながら勝利したという。

嫌々って何だ。

二度目に現れたのは、20年前という随分最近の話だ。

唯、この二度目は魔法世界のみ現れたらしく、旧世界には現れなかった様だ。

理由は直ぐに理解できた。

魔法世界で起きた大分裂戦争だ。

アレは一つ間違えれば魔法世界は消滅していた程危険な戦争だったのだ。

抑止の守護者の一人や二人、来るだろう。

たぶん。

あれ？ だが魔法世界関連でアラヤやガイア動かねエンじゃねエか？

兎に角、その大分裂戦争中は特に活躍したのかと言えば活躍したが、戦争にはあまり加担していなかったようだ。

戦争による被害 戦災孤児や村や町の復興作業に、唯ひたすら尽力していたらしい。

紅き翼を英雄と讃えられているのに対し、神の再来は二人目のキリストとして崇められているようだ。
ザ・セカンド

唯、元老院お膝元の魔法使いには目の上のたん瘤みてエだが。

因みに死亡説等は流れておらず、暗殺喰らった等の噂もたっていない。

死んでたら死んでたで、666(トリプルシックス)に暗殺されてアダムプロジェクトでも興きてンのかと思うわ。

しかし、この世界にザ・セカンドがいるとは思わなかったぜ。

フラグメント
破片を持つ俺が生まれた影響か……。

まア考察はコレくらいにして、話を戻そう。

「ねえレン！」

「判った判った。ちったア落ち着け」

そもそも何でネギはこんなに親父殿に御執心なんだよ。

最早修正力働いてるよなコレエ。

少年さア、大志を抱くの早すぎんだよ。

「確かに、俺達の父親は帝国と連合との大戦の活躍して英雄と呼ばれるよオになったのは確かだ」

「やっぱり、とうさんは凄いんだー！」

「大戦……………」

アリアとネギの反応は対照的だった。

ネギの表情は嬉。

ネギは大戦の英雄の意味が解らず、英雄^{ヒーロー}である処だけに反応している。

まだ三歳にも満たない少年なのだから仕方はない。

片やアリアの表情は失望、悲があった。

アリアは前世の記憶は無くとも、自分とエミヤシロウの知識を継承しているのか、『大戦』というワードに顔をしかめた。

アリアは解ってるんだ。

大戦の英雄が誕生するのに、どれだけの屍が必要なのかを。

大戦の英雄は、エミヤシロウが描くヒーローとはかけ離れすぎている。

その呪いの前任者である衛宮切嗣は、寧ろ英雄を憎悪していた。

エミヤシロウと同化したも同然のアリアには、根元的に認められ無エみてエだ。

最初はエミヤシロウの様に自分の命を軽視して他人を助けるのではと焦ったが、アリアにはそんな兆候は見られない。

「僕もとうさんみたいになれるかな……」

「ネギ。親父殿に憧れんのは構わねエが、だからって同じになるオと思つンじゃねエぞ」

「なッ!?! な、何で、どうして!?!」

「誰かが誰かになれる訳ねエからだ」

俺はネギの頭を、うちはイタチの様に軽く小突き、最近ストレスで重くなった腰を上げる。

「どんなに頑張っても、幾ら好きでも、幾ら憧れても」

ネギ・スプリングフィールドはナギ・スプリングフィールドではないのだから。

アリアのキラキラした「私にもやってください！！」的な視線とか俺は見てねエし知らねエ。

「現代は英雄なんて必要としてねエし、戦争自体早々起きねエ。戦争が無かったら誰も英雄なシかなねエよ。戦争なシぎ、誰も好きじゃアねエシだからよ」

少なくとも地球では。

火星や惑星ベジータ辺りは知りませんッ。

「うう……、レンの話は難しくて分からないよ……」

ネギは頭を押さえながら涙眼を此方を向ける。

まだネギは（アリアも）二歳になったばかりだ。今は分からないくらいがイイ。漠然と伝わったらめっけモンだ。

そしてコレはチャンスだ。

ネギを英雄になるオと思わせなければ、『マギア・エレベア闇の魔法』に手を出すことはねエ。

コイツは人としての真つ当オな人生を享受出来るし、原作では決して表に出なかつた犠牲を軽減出来る。

魔法世界の問題はア……まア、俺がなんとかする。

幸か不幸か、俺は『マジックキャンセラー魔法無力化能力者』だ。

自己犠牲はゴメン被るが、何とかなんだろ。

「当たり前前エだ。英雄云々語る前に、テメエをテメエで守れるよオ頑張りやがれ」

二歳児には厳しいが、ここはキッチリ折っておく。多分理解も出てねエし、物語が始まる頃には覚えてねエだろオが、ソコは時間をかけるしかない。

俺も早く破片フラグメントを使えるよオにしねエとなア。

どオやらミッシングリンク級のヤツは、何らかの心的ショックが必要みてエだからな。

そもそもフラグメントは、脳のリミッターを何らかの方法で外す事で発動する。

ミッシングリンク級となれば、複数同時。

一朝一夕で出来るわけがない。

エ。だが、この準備期間が終えれば即転生者潰しに赴かなきゃなんね

エよオだ。アイツは具体的な期間は言わなかったが、少し急がなきゃなんね

全ては報酬の管理者フルボツコの為ッ！！

違います。

今使えるのは、生まれた時から使える神級の『PF・ZERO』^{アダム}とミッシングリンク級以下の能力。

ミッシングリンク級は『^{トッヘルゲンガー}変身』しか使えねエ。

これは『アイツ』の計らいか？

「これはアリア、オマエもだぞ」

「はい！」

嬉しそオだなア……アリア。名前呼ばれるだけで。

つつか、何でアリアはこんなに俺を慕ってくれてんだ？

でもまア、今はこんななんでも成長して思春期突入すりゃア、ウザくなんだよなア……。

『フツ、そんな訳がないだろう』

……マジいらねエ幻聴が聴こえたよオな気がすんのは、気のせいだな。

「レン、どこに行くの？」

「魔法学校でネカネ姉さんが魔法薬に必要な薬草がいるっつってだから、サプライズも兼ねて森で探しに行くんだよ」

これはマジ。

当たり前だが、ネカネ姉さんは長期休暇中に宿題がある。

忙しいのに、俺達の母親代わりをしてくれている礼だ。

「にいさまが行くならわたしも行きます!」

「ば、僕も!」

「三人いっぺんにいなくなったらサプライズになんねエだろオが。ジャンケンで決めるジャンケンで」

結果、勝者アリア。

エミヤの心眼（真）使ったなオイ。
ジャンケンでそんなスキルつかってんなよ。

つか、究極の後出しだよなアソレ。

「ネギ。折角姉さんが帰ってきてんだ、学校の話でも聞いとけ。
オマエ絶対入んだろオが」

「あ、うん！ 判った！！」

そう言って、ネギはネカネがいる協会に向かって走り出した。

よし、イイ兆候だ。

元々ネギは家族愛 とまで言わねエが、孤独感で父親のナ
ギを求めるしかなかったから、結果的にあんな周りなし崩しに巻き
込むウゼエクソガキに育っちゃったんだ。

ネギ自身もだが、周りも結構原因は有ったが。

そとなる前に矯正してやりゃア何とかかなんたる。

出来れば母親も求めてほしかったんだかなア。

「にいさま」

「あん?」

「私達のかあさまは、どんな人何ですか?」

「」

「ツたく、この妹は見透かしてくれる。」

「二歳児とは思えない洞察力をお持ちなこつて。」

流石、霊長と森羅の守護経験者。

ものの見事に異常だ。
アフノーマル

「今は無きウエスペルタティア王国最後の王女。大戦の元凶として十八年前に処刑された事になっている、アリカ・アナルキア・エンテオフユシアだ」

「つまり……」

「元老院の老害共が、自分達の罪をおふくろに擦り付けたんだよ。戦争終結の一番の尽力者だってエのに、舐めた真似してくれるよなア。つたくよオ」

「つまり処刑寸前でとうさまがかあさまを救出ですか。英雄な上、そんなおとぎ話みたいな事もやってたんですか……」

「魔法を5・6個しかおぼえてねエ学校中退者の単細胞^{バカ}がだぜ？」

「……………（ポカン）」

ハッハッハッハ。

バカ面が見たかったよ。

娘のこんな顔見てバカ面をさせるおふくると父親バカの顔を。

「そ、それはネギに話さないんですか？」

「どっち？」

「かあさまの事です」

「アイツ自身が聞いたら答えるよ。本当は至極簡単な問いなんだがなア」

「……わかりました」

元老院、マジでこの手でブチ殺してやりたかったよ

薬草の場所は大体判ってる。

鍛練の為に森に生息してるグリズリーとバトる最中に、森の空間把握はバッチリしてた。

その時その薬草を見たことが何度かあったから、よく覚えてる。

ン？ グリズリーはどうしたって？

能力試してる最中にしゃしゃり出てきたンだよ。

生息地間違っただら。

まあ一応勝てるが、殺してねえよ。つか、流石に三歳児じゃア殺せねえし。

『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』？ あんなモン使ったら鍛練になンねえよ。

それこそ森の地形が変わる。

そして鍛練中に新しい発見。俺は最低限のスペックとして『無窮の武練』があるみてエだ。

これは非常に嬉しい。

おそらくあんのバカ管理者が気分で付け足したのだからオが、これは素直に礼を言う。

能力なんかスキルなんか判ンねえが、理論上『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』の内蔵

宝具の真名解放が可能なんだ。

無論、全ては体が資本なので、三歳の我が身では負担がデカくて出来ねェンだが。

「帰りは遅くなってネギに無理させちまうと悪ィし、株で儲けた金で買った転移符持ってくかア」

「時々にいさまが遠く感じます」

敢えて言う。

黄金律Aボデイ、最高オ。

「初陣の獵犬諸君」

「さあ　　食事としようか」

そんな樂觀視していた俺にババア転生者の飼い犬共が蠢いてたなんて、
思いもしなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0445ba/>

ネギま！ ～抑止の断罪者～

2012年1月2日00時46分発行